

森市長退任記者会見（令和3年4月23日）

■ 退任挨拶

市長

先の4月1日の定例会見の際に、今日申し上げるようなことを先走って申し上げてしまいましたが、改めて記者クラブの皆さん方にはこの19年余にわたって、大変なお力添えをいただきました。

心からお礼を申し上げる次第であります。

今日の気持ち、感慨については、先ほどの退任式でも申し上げたとおりであります。

思い起こすと次から次へといろいろな思い出がよみがえって来ますけれども、全体としては大変恵まれた「市長生活」「市長人生」というものを過ごさせていただいたと思っています。

これもひとえに職員の皆さん、市民の皆さん、議会、そして皆様方をはじめとする周囲の多くの機関の方々の支えのお陰だと思っております。

記事にしにくいと思いますが、昨日、画期的なことがありまして、昨日の午前中に朝日新聞の本社から（記者の方が）取材に来られました。

この19年の間に市長室に入られた朝日新聞の記者は2人目であります。コンパクトシティ、さらに公共交通がいかに大事かということについて忌憚のない意見を聞きたいとの取材の趣旨でございました。

ことさら朝日新聞さんを挙げたのではなくて、ここへきて、そういう切り口での取材が本当に多くあります。

全国で高齢化が進んでいく中で、交通の不便なところの暮らしにくさということが改めてクローズアップされているのだらうと思います。

その不便な交通について、どうやったら質を高めていけるのか、どうやったら暮らしやすい地域にしていけるのかということについて、どちらか

と言うと、車優先や路面電車の廃止、車線を増やすというベクトルの中で、あえて車線を減らして軌道を敷設するという「ドン・キホーテ的」なことをやってきましたが、方向性は間違っていなかったなど、改めて思っている次第であります。

私のほうから多くは語りませんが、一言で言うと、最初に掲げた政策、最初に掲げたビジョンは1年かけて、平成14年度に作りました。

そして、平成15年3月に発表したわけですが、いわばスケジューリングどおりに一つずつ整備が進み、そして、ソフト事業についても、その都度いろいろなことに取り組んできたこと、先ほど（退任式で）今本副市長からの挨拶でも述べていただきましたが、福祉、教育、文化、暮らしやすさ、あるいは美味しいものがあるとか、まさに包括的な形で都市の力が高まってきたことが良かったと思っています。

それに加えてもう一つは、先ほどの（退任式の）挨拶で言いましたが、何よりも市民お一人お一人の皆さんのシビックプライドが高まってきているということを皮膚感覚で感じる事が本当に多いので、これも大きな成果だったと思っています。

先ほどの部局長会議で申し上げましたが、5年前の3月31日の退職職員の辞令交付式の際に、「桃栗3年、柿8年、ゆずの馬鹿たれ30年」と、皆さんにはこれから30年の充実した人生があるのだという話をしました。

そうしたら、京田さんという方がその日の午後にゆず（の木）を買って帰ったということを聞いていました。

先般お会いしたときに「実がなりましたか」と聞いたら、「まだまだありません」と（いうことでした）。

実は、私も過日、ゆずの木を2本買い求めてきました。まだ家には届いていませんが。

それをこれからの人生の大きな道しるべとして、実がなるまで元気ががんばっていきたいと思っています。

そういうことで皆様方へのお礼、そして、19年間への感慨、自分の思いとさせていたいただきたいと思えます。

■ 質疑応答

記者

退任されるこの日をどのような気持ちで迎えられたのでしょうか。また、在任期間中を振り返って、最も印象深い出来事についてお聞かせください。

市長

今朝（市役所に）出てきましたら、秘書課の職員に「夕べは眠れましたか」と聞かれました。ぐっすり眠れました。しかし、いつもより早く、午前4時半に目が覚めました。

口では強気でものを言っていますが、内心ではやはり感慨深いものがあったのだろうと素直に思っています。

何といっても無事にこの日を迎えられたことが一番うれしいことだと、今日は1日中、そのように思っています。

在任中で一番印象に残っていることと言われると難しいのですが、平成15年3月に発表したビジョンが一つずつ具現化してきて、そして去年の3月21日に路面電車の南北接続が完成した、やはりこの瞬間が一番強く、印象に残っています。

また大変うれしい瞬間だったとも思っています。まさにその時は、若干涙ぐんでいたということをも今も思い出しています。

今日の日よりもその日のほうが感慨深かったということから、心中における位置づけ、ポジションを推し量っていただければいいかなと思います。

一番ではないとしたらいくつもある中で、皆さんあまり言われませんが、19年3カ月の在任中に、田中耕一さんと梶田博士と本庶^{ほんじょ} 佑^{たすく}先生という、富山市民や富山市出身者、本庶先生などは富山市に本籍も置いていらっしゃると思いますが、そういう3人もの方々がノーベル賞を受賞されたということは、これは大変素晴らしいことだと思っています。

今日の日にあたり、改めて、そのことをみんなで確認してほしいと思います。

これがまた市民一人一人のシビックプライドの向上につながると思います。この程度の規模の自治体で、こんなことありえないでしょう。

19年の間でノーベル賞受賞者が3人も出てくるというのは、大変ありがたかったと思います。

記者

大きな達成感を持つての退任かと思いますが、一方で、課題として残ったとか、うまくいかなかったといったことはあるのでしょうか。

市長

走りながら考えているというところがあって、不十分な準備や検討で動き出してしまうということは、いくつかありました。

しかし、全ての施策について、向かっている方向、最終的な目的は一緒に、市民一人一人のクオリティ・オブ・ライフを上げるということなので、前へ進んで一歩、二歩下がったり、また三歩前へ出たりと、いろいろなことをやってきたわけですが、全体としては順調に進んだなと思っています。

市町村合併の協議に入る前に、15市町村で広域圏行政をやっていて、その15市町村のうち14市町村の首長さんとお話をして、そのうちの7つでまとまっていったわけです。

しかし、その後、広域連携中枢都市圏の話が総務省からあり、当初私は、正直、否定的でした。

市町村合併に苦勞してきた7市町村であるのに、その際に参画しなかった広域圏の他の自治体と連携を組むということは、市町村合併の際に侃々諤々かんかんがくがく（の議論を）やってきて、そしてもう亡くなられてしまっている首長さんもおられるわけで、その方々に対して、そのことは本当に誠意ある態度なのかということなどについて、一時期逡巡したことがございます。

結果的にはやはり、富山市は広域圏のいわば長男のような立場ですので、例えば、先般の立山町との消防の連携や、その他福祉の領域においても、それから「孫とおでかけ支援事業」などについても連携してきているわけ

です。

これから市長も代わりますので、合併時のこだわりのようなことはあまり表には出てこないのので、一層の連携を進めてほしいと思います。

そういう意味では広域圏全体の連携ということについて、少し不十分なままかなという反省はあります。

記者

新市長の藤井さんは現市政を継承していくと（選挙戦を通して）訴えてこられました。藤井さんに対する託す思いや要望といったものはありますか。

市長

県と県議会との関係、あるいは県の予算編成も含む執行体制や組織としての県の文化と、富山市と市議会（との関係）、あるいは富山市という組織の文化とは、やはり違いがあるのです。

私も最初、面食らったところもありますので、藤井新市長もその辺りについて、特に彼は6年間も政務調査会に入っていたので、予算編成など、あの方なりの県における経験というものがベースになっていると思うのですが、その辺について、両方の違いをしっかりと踏まえた上で、富山市のやり方というものについて、早くなじんでほしいと思います。

例えば、今朝のニュースで、県が5月1日から県内宿泊施設に宿泊する方を誘導するために、約6億円の専決処分を行ったという報道がありましたが、富山市ではあのようなことはないですよ。

それは別に6月議会でもよいことではないかと思うのです。

ただ、どうしても急いでやらないといけないとき、例えば、温泉施設でポンプが壊れたのだが予算がないとか、それは営業を止めるわけにはいかないから専決（処分を行います。）。

例えば、事業についての専決理由のあり方について、私がこだわりすぎるのかもしれないけれども、富山市（が専決処分を行うの）は、除雪費用ぐらいで、（専決処分を）あまり乱発しませんね。そこが象徴的で違いが

あるということです。

さらに言うと、県の予算というのは各目、節に諸費というものがついていて、建築工程でいう経費のようなものがあるのですが、富山市の予算というのはのりしろもないくらい、ものすごくきちきちの予算なのです。

従って、かつて食糧費などで問題があったようなときでも、富山市ではそういうことは起きなかったわけです。

予算の余ったものをプールしておくとか、そういうことの全くない非常にクリーンで、しかし窮屈な予算編成の仕方なので、この辺りについても、おそらく新市長はしばらく面食らうところがあるのではないかと思います。元々能力のある人ですから、早く呑み込んでくれるだろうと思っています。

それで、私は1年半前の6月に後援会の総会で、今期で辞めますと申し上げたときに、若干声は小さかったのですが、市町村合併の検証ということも一つあるのだと申し上げてきました。その思いは今も変わりません。

それは先ほど言いましたが、もう亡くなられた方も何人もおられる（市町村合併当時の）各首長の思い、当時の議会の代表の方々の思い、そういったことについて、十分意を体してやってきたつもりですが、まだ足らざるところがあるということなどについては、私にはもう検証はできませんし、自分では十分やってきたつもりでいます。

その辺りを第三者的な立場で少し検証していただくことが、（市町村合併に）苦勞した（当時の）首長さんたちに対する私自身の取るべき態度かなと思っていますので、旧町村出身の方に次期市長をやっていただくことに対して密かに期待があったわけで、口にはしませんでしたが、思いとしてはそういうことです。

記者

最後に市民へのメッセージをお願いします。

市長

先ほど言いましたように、かなり多くの市民の方々が富山市民でよかったとか、富山市に住んでいて良かったと感思っていただいているということを感じています。

我々の立場は、サイレントマジョリティがどこにあるかということをしつかりと見定めること（が大事）だと思思いますので、そういう意味で市民の方々がそう感思していらつしやるということを感じられるようになったことは大変うれしく思思っています。

しかし、それはゴールではなく、改革や向上するための努力というものはエンドレスですので、市民の方々には、これからも富山市の市政執行についてしつかりとご支援をいただき、お支えもいただき、また要望についても一緒に語り合っていくということについて取り組んでほしいと思思います。

今の日本国の状況から、少子化の流れは止めようもありません。

従って、人口減少も止めようがないと思思っています。

ですが、地方都市の中でもマイルドに減少していくということを目標に、全国平均の減少率に何とかくつついていきたいという思思いで取り組んできました。

市民の皆さんにも、そういったことについて、もう一度受け止めていただき、子育て環境の充実といったことなどについて、行政もしつかり取り組みますけれども、市民の方々にも自らが当事者だという思思いで、日々の暮らしの中で、お互いが暮らしやすい環境というものについて、役割を果たしてほしいと思思います。

それが若い世代の暮らしやすさにつながり、お子さんの出生ということにもつながっていくのだろうと思思います。

（市民）お一人、お一人が、自らが演者であるということを目意識していただき、行政と市民とが一緒になって、スクラムを組んで、総合力の高い

市にしていくという役割を果たしてほしいという思いです。

愛媛県知事のように涙が出ればいいのですが。中村時広さんですね、あの人らしいですが。正直言うと、今、ウルウルとしたのでごまかしたのです。

記者

今ほど市民の皆さんへのメッセージをいただきましたけれども、市議会へのメッセージについては、これまで中々、口にされていませんでしたが、最後をお願いします。

市長

（富山市議会は、）先日の（市議会議員）選挙以前の時点で言うと、1期及び1期半の方、今の状態（今回の市議選後）で言うと、1期、2期及び2期半の方、そうした方々が圧倒的に多いわけです。

つまり、議会人としての経験値の低い方々が圧倒的に多い議会なので、議会運営ということについて、例えば他の議会の有り様などを勉強して、活発な議会活動を実現してほしいと思います。

以前に申し上げたこともあります。私が初めて県議会議員に当選したとき、大先輩である河合常則さんから、石澤義文さんや笹島太一さんの過去の質問を全部読むようにと言われました。

当時、（インターネットで）キーワード検索などが出来る時代ではありませんでしたので、議会図書室に3カ月ぐらいの間こもって、大先輩の質問を全部読みました。

そのことが、その後、7年間続いた県議会議員としての議会での質問の内容や問題の捉え方に大変参考になりました。

市長になってからも、若い議員の方々に何度もそういうことを披露してきているのですが、市議会における先輩議員の質問を深く読み込んだ気配

を感じさせる方はあまりいませんでした。

当選したらそれでよいということではないので、当選したからこそ勉強して、当局がたじろぐような鋭い質問をしてほしいと思っています。

これは激励です。ぜひがんばってほしいと思います。

記者

退任された後のことなのですが、以前から市長は梨栽培をされるとおっしゃっていますが、その他にこんなことをされたいとか、チャレンジしたいとか、退任後のプランがあればお聞かせください。

市長

先般申し上げましたが、日本政策投資銀行からは特任顧問という肩書をいただきまして、明日からはその名刺を使ってよいと言われています。

早速、会議のスケジュールも入りました。

今後、全国の自治体で富山市の取組みを話すとか、PPP や PFI のシンポジウムなどでパネラーとして話すとか、いろいろなことのご期待が出てくるだろうと思います。

そういうことについては、しっかりと対応していきたいと思っていますし、富山市の取組みというものを披露していきたいと思っています。

また、富山大学からは客員教授の称号をいただいていますので、先般も社会人の方々の集まりで講義をしました。

来月には学生の皆さんを対象にグランドプラザで授業をするということなども予定しています。

それから、京都大学や中央大学のほうからも毎年、非常勤講師の依頼をいただいております、(現時点で)まだお話しはありませんが、ひょっとすると、そういうご依頼も出てくるのかなと思いますので、積極的に受けていきたいと思っています。

正直言いますと、内々の打診として、顧問や社外取締役のような、まだ熟度の低い範囲でのお話がありますが、富山市が取引をしていた企業、富山市から補助金をお渡ししていた企業との関係において、そういうことの立場に就くことは避けなければならないということが私の考え方ですので、一定の期間はそういうことについてはご理解をいただくようにしていきたいと思います。

ただし、もしも、県外の企業や、富山市が取引をしていないような企業からそういうお話があつて、出来る範囲でそういう仕事にも就かせていただければ、自分自身の勉強にもなるので、十分内容を吟味した上で、お受けできるものはお受けしていきたいと思っています。

もちろん主たるものは梨栽培なので、トラクターと防除の機械は新車を購入しました。私のブログを見ていただくといいのですが、トヨタでも日産でもホンダでもスズキでもありません。クボタです。

大変なのですよ。防除するといっても、それぞれの薬ごとに希釈率が違うから間違えたりしないように、それも一度に3種類の薬を入れるということなど、しっかりと経験を積んでいきたいと思っています。

記者

これまで何回も否定されていますけれども、今後の政界への復帰ということについてはいかがでしょうか。

市長

それは全くありません。

自由人として生きていきたいとわくわくしているのに、そんなことは全くないです。先日、北日本新聞さんの特集記事の最後にも少し書いてありましたね。結構楽しい冗談でしたね。全くないとは言えないですが。

去年はコロナで何もできませんでしたし、今年も今のところ難しいかも

しれませんが、もう一度登山もしてみたいし、ヨットももう一度やりたいし、スキューバダイビングもそろそろ年齢的に難しくなるのでやりたいし、音楽やイタリア語の勉強も再開したいとか、いろいろな思いは持っています。

一昨日、パソコン教室の入学願書ももらってきました。

いい加減な知識なので、きちんとワードやパワーポイントを勉強しようかなと思います。

市長

それでは、本当に長い間ありがとうございました。

これからもどこかでお会いしたときには声を掛けてください。

午前中は畑にいますので、来ていただくとお話しはできると思います。

ぜひ皆さん、若いのですから、お一人お一人の立場で、今後とも活躍していただくことを期待して、お礼とさせていただきます。

ありがとうございました。

※発言内容を一部整理して掲載しています。・・・富山市広報課